

主 題：神の力によって生きる

聖書箇所：ルカの福音書 24章46-49節

私たちは余り教会暦についてお話することはありませんが、実は先週の日曜日は教会暦でペンテコステでした。ペンテコステと言うと使徒2：1のみことばを思い浮かべるのではないかと思います。そこには「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。」と記されています。「五旬節」、別名七週の祭りとも言われますが、春の収穫感謝の祝祭で、過ぎ越しの祭りに始まり五旬節で終わります。その期間の長さが50日だったので、五十日の祝祭もしくは「五旬節」と言われています。「五旬節」のことをペンテコステと言うのは、ペンテコステというギリシャ語が「第五十の」を意味するところからです。実は、イスラエルのお祭りの中で特に大きなお祭りが三つあります。一つは今私たちが見ている五旬節の祭り、もう一つは過ぎ越しの祭り、そして仮庵の祭りというのがあります。この三大祭りには人々がみんなエルサレムに集まって来るのです。そしてこの日に、神が約束されていた聖霊なる神様がひとりひとりの信者に下るといいうすばらしい働きを我々は聖書を通して知るわけです。

このペンテコステは教会にとって非常に大切な日です。なぜかという、このペンテコステ以降、この地上に教会が誕生して行くからです。この教会誕生に関わったのが弟子たちです。でもその大切な務めをなした弟子たちの信仰はと言うと、余り褒められたものではなかったのです。どちらかという、彼らは疑い深い者たちでした。彼らが初めから主にとって役に立ったかと言うと、そうではなかったことを我々はみことばを通して知ることができます。でも結果的に彼らは神様によって大いに用いられる、大いに役立つ者へと変えられていきます。そのきっかけがこのペンテコステだと言えます。ですから今から私たちは彼らに一体何が起こったのか、そして彼らに起こった変化は、当時の弟子たちだけではなく、今の私たちも彼らと同じように経験することができるということです。ということは私たちも彼らと同じように主に大いに用いていただくことが可能なのです。どのように主が彼らを変えていかれたのか、私たちはルカの福音書24章から学んでまいりましょう。

* 「不信仰の弟子たち」：その不信仰さ 24：1-46

まず、ルカ24：1-46を見ると、そこには残念ながら弟子たちの不信仰の姿を見ることになりません。主イエス・キリストが復活されたことがここには出てきますが、その復活の後、弟子たちはというと、この復活に関して疑念を抱いています。彼らはなかなかこの復活というものを信じることができませんでした。そのために、イエス様は復活してから昇天されるまで、天にお帰りになるまで40日の間、この地上にいて、何度も弟子たちの前に現れて復活の事実を伝え続けました。しかしながら旧約聖書や主イエスご自身から、しかも直接教えられていたにもかかわらず、彼らはこの復活をなかなか信じることができなかつたのです。

24章を見ると、まず女性たちがイエスの墓に行つて復活の事実を知ることが記されています。ルカの福音書の中では「マグダラのマリヤとヨハナとヤコブの母マリヤとであった。」と、10節が私たちに教えます。彼らは、空の墓を見ました。彼らはイエス・キリストがよみがえったことを知りました。そして彼らは使徒たちにそのことを伝える目的で彼らの所に行きます。11節「ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかつた。」とあります。本来ならば、それを歓迎するはず、それを待望しているはずの人たちがよみがえったというメッセージを聞いた時に、その女たちの話を「たわごと」としか思わなかつたと。

またこの後13節にエルサレムからエマオという村に向かう途中のふたりの弟子たちの話が出てきます。この中にイエス・キリストのさまざま出来事について、彼らがいろいろと知っていたことが記されています。まず、女たちからイエスの墓が空であると聞いて、実際に行つてみたらそのとおりであったという知らせも聞いていました。また、イエスがよみがえったということも聞いていたし、その話を知っていましたが、それでいながら彼らはそれを受け入れることができないでいた。天使たちが話したことも、女たちが話したことも、実際に墓に行った者たちの話も知っていながら信じていなかつた。しかし、25節「愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。」と、主は彼らを責められたので、自分たちと話していたのがよみがえられた主だということを理解し、彼らはすぐさまエルサレムへと戻るわけです。そして弟子たちのところに行くと、そこに十一使徒がいたことがみことばに記されています。彼らは今の証言だけでなく、ペテロからイエスはよみがえったという報告を聞いていました。彼らはそれでもなかなか信じることができなかつた。36-38節を見ると「これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。する

と、イエスは言われた。『なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。』と。信頼できる人たちのこれだけの証言があるにもかかわらず、まだ彼らは信じることができないでいました。

イエス様がこうして彼らの所に現れてくださった様子が今お読みした所に出てきました。この家の扉は閉じられていたと、ヨハネ20：19が教えています。彼らはユダヤ人達を恐れて扉を閉じていた。そこに主が入ってこられて、このような話をなさるのですが、もう一度36節から見ると、イエス様が彼らの真ん中に立たれた時に彼らは大変驚き恐れて、霊を見ているのだと思ったと書いてあります。イエス様がガリラヤ湖の上を歩いて来られた時に、弟子たちはそれを見てあれは幽霊だと言っています。マタイ14：26、マルコ6：49にもそうみことばは記しています。だからイエス様は39節で「わたしにさわって、」、そして41節には「何か食べ物がありますか。」と言っています。これは彼らがイエス様が肉体を持ってよみがえったことを信じていなかったからです。確かに自分たちの前には、自分たちが愛したあの十字架で苦しんでいのちを神にお委ねになったイエス・キリストの姿があります。それでもまだ彼らはイエスが肉体を持たない無形の形で現れたと思うわけです。そこでさわってみなさいと言うのです。イエス様はご自分の復活が霊ではなくて肉や骨が備わったもの、からだを持ってであるということを示されます。それでも悲しいことにまだ彼らは信じていません。41節「それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているのです、イエスは、『ここに何か食べ物がありますか。』と言われた。」とあります。ここで食事をすることによって、ご自分の復活を証明されたのです。

神が大いに用いられた使徒たち、イエスの弟子たち、みんながみんな最初から完璧な信者であったわけではありません。もちろん復活という出来事をなかなか信じることはできないこともよくわかります。そしてよく見るならば私たちの姿をここに見ます。我々は神のおことばを聞いていても、信じていると思っても、試された時にその信仰がぐらついたりします。補足ですけれども、1週間後にこの場にいなかったトマスにイエス様は現れておられます。

*「弟子たちを変える主のみわざ」 46-49節

こういう弟子たちだということを見てきました。本来なら一番復活を喜んでいるはずの彼らが残念ながらそれを喜べないでいた。それを信じることはできないでいた。このような弟子たちのうちに主は働きをなされ、彼らを変えていかれるのです。では神はどんなことをなさったのか、今から弟子たちを変える主のみわざについて46-49節を通して見ていきます。

A. 聖書と主への信頼を強める 46節

一つ目に神は、この弟子たちの聖書と主への信頼を高めようとするのです。

1. 聖書への信頼を強固にした

46節「こう言われた。『次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、』と。まず主は聖書への信頼を強固なものにしたのです。聖書への確固たる信頼を彼らが得るようということなのです。

44節にイエス様は「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」、少し戻って27節にはエマオ途上のふたりの弟子たちに対して「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事ごらるを彼らに説き明かされた。」とあります。違うことばが使われていますが、同じことです。どちらその当時の聖書、旧約聖書からイエスについて書かれてあることを説明されたのです。44節で「モーセの律法と預言者と詩篇」という三つの区分があると言われましたが、これが旧約聖書の区分であると言われています。ですから言いたいことは同じです。主は、どちらも旧約聖書全体からこのメッセージをお話になっておられます。45節には「そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、」とあります。イエス様はこうしてみことばを教えるのですが、イエス様ご自身が「聖書を悟らせるために」、つまり聖書を理解するために、その教えを納得して合点するように働かれたということなのです。そのために「彼らの心を開いて」この教えを与えに行かれるのです。

*旧約が教える主イエスについての大切なこと：十字架での死と三日目の復活

私たちは旧約聖書の中にイエス様に関するたくさんの教えがあることを知っています。その中でも特に二つのことをここで挙げています。この二つのことがその中でも最も大切なことだからです。46節にも「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、」とあったように、イエス・キリストの十字架と復活を改めてここで主はお話になります。イエス様がなぜこんなことを旧約聖書を通してお話になったのかというと、まさにイエス・キリストこそが約束の救世主であったということをも一度彼らの前で明らかにするためです。その約束が旧約聖書の中にされていたわけで、そしてこの弟子たちはイエスの十字架を見、そして今イエスの復活を実際に見ている。このことをもってあの聖書が預言していたことが今この私によって成就した、つまり私がその約束の救世主なのだということをも明らかにしたのです。

1) 誕生：エレミヤ23：5、イザヤ11：1—11、ミカ5：2、イザヤ7：14

旧約聖書には、イザヤ11章の中で、この約束の救世主がダビデの子孫として生まれることが教えられています。ミカ5：2ではベツレヘムで生まれることが書かれているし、またイザヤ7：14では処女から生まれることも書かれています。

2) エルサレム入城：ゼカリヤ9：9

またこの約束の救世主は雌ロバの子に乗ってエルサレムに入城して来ることがゼカリヤ9：9に約束されている。そのとおりにイエスはエルサレムに入城して来られた。

3) 十字架：イザヤ53：5、詩篇22：69、ゼカリヤ12：10

またこの救世主は十字架で死ぬことがイザヤ53：5で預言されていました。「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、(そのからだを何かが貫通するわけです。そして)私たちの咎のために砕かれた。」と。まだ十字架刑が存在していない時に十字架刑でもってこの約束の救世主が死を迎えることが預言されていました。

4) 復活：詩篇16：10

そしてそれだけで終わるのではなく、彼はよみがえるということ、特に詩篇16：10に「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」とあります。彼はいつまでも墓の中にいるのではなく、その墓から敢然とよみがえってくると。

結論：こうして確かに聖書はこの約束の救世主に関して教えています。そしてイエス様はこの弟子たちに対して、彼らの前に復活の主ご自身が現れることによって、この約束が成就したのだと教えます。約束の救世主に関する預言が完全に成就したということは、この聖書の真実さを証明した。聖書がそのことを預言し、その預言どおりになったということは、この聖書は信頼に値する神のことばであると。だから私たちは信頼すべきだと。神様がお使いになる人々には同じ特徴があります。その人たちは神のことばに対する全き信頼を持っています。聖書を読んで聖書を学び、神は全能だと、神のすべての属性を知っているかもしれない。でも大切なのは知っているかではなくて信じているかです。私たちはこの聖書は神のことばであると。ある面では私たちはこの聖書にいのちをかけているのです。なぜならこれが偽りだったら我々の信仰はすべて空しいわけです。でも我々はこの聖書が神のことばだという信仰に立っているのです。問われたのは、ならばどうしてそのように生きないのかです。神が言われた、私はそれを信じるのだと。聖書が言っていることは確かなのだと信じるのだと。

今私たちは余り気づいていませんけれども、世界的に見てそういうことが言えない社会になりつつあります。今の私たちの国ではそういうことを自由に言えますが、もうそれが言えない、そういうことを言うことによって他の宗教を信じている人たちを差別しているとか、また今私たちが持っている信仰が人の生命を分けるのです。今でも多くのクリスチャンたちが殉教しています。我々が生きている今の世界では、この信仰を告白することによって、守り続けることによって首がはねられています。それが私たちの国に起こらないという保証はありません。我々はかつてこの国にあってクリスチャンたちの迫害を経験しています。私たちが考えなければいけないこと、この弟子たちが主から問われたことは何か——この神のおことばは真実である、聖書というのは神のことばなのだということをまず彼らがいま一度確信することが、彼らが神に用いられるために必要だったのです。そしてそれはあなたにも必要です。もし我々がいろいろなことを日々経験する中にあって、聖書がこう言っているから私は信じる、聖書がこのような約束を下さっているから信じる、そんな信仰者に我々ひとりひとりが変えられたら、間違いなく私たちの家庭や教会、職場や学校は変わってきます。私たちはどこかで教会は教会、日常生活は日常生活、そんな区別をしているのかもしれませんが。まず神が用いられるためには、この聖書に対して強い信頼が必要なのです。神のことばだから信用する。それが必要だったのです。

2. 主イエスの教えへの信頼を強固にした

二つ目に主がこの弟子たちにされたことは、主イエスの教えへの信頼を強固にしたのです。主イエスの教えへの確固たる信頼を彼らが得るようにと働くのです。イエス様はご自分がこの後十字架に架かって死ぬこと、その三日後によみがえるということは何度も人々の前でお話になっておられました。例えばルカ18：33には「彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」とあります。そしてイエス様は言われたようにみずから進んで十字架に架かり、三日後にその死から敢然とよみがえってこられたと。

結論：ですからイエス様はご自分が語られたとおりに十字架に架かり、そして復活されたということは主のおことば、また主の教えの真実さを証明されたのです。イエス様が言われたことは真実だ、イエス様が教えられたことは真実であり、必ずそのとおりになるということです。もちろんその当時新約聖書はまだ完成していなかった。我々はイエス様が言われたことをこうして新約聖書を通して見ることができます。イエス様が言われたら必ずそうなります。イエス様はこれから世界はこうなっていくと言われ

たし、このような終わりを迎えるのだと言われた。必ずそのとおりになる。なぜならイエス様が言われたとおりに彼はその死からよみがえってきたからです。だから私たちはイエス様の言われたことを信じるし、そこに信頼を置くのです。この弟子たちはイエス様から大きな使命を直接いただきました。でもその使命を果たしていくために、イエス様の言われたことは本当にそうだという確信を彼ら自身が強めることが必要でした。

3. 主イエスご自身への信頼を強固にした

弟子たちが聖書に対して強い確信を持つだけではない。イエス様の言われたことに強い確信を持つだけではない。三つ目に私たちが教えられるのは、主イエスご自身への信頼を強固にすることが必要でした。主イエスご自身への確固たる信頼を得るということです。

主イエス・キリストが生まれる前のことを思い出してください。ヨセフに御使いガブリエルが現れました。これから生まれる男の子はどんな男の子なのか、天使がヨセフに告げました。マタイ1:21「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」と。天使はヨセフに何を告げたのか——。ここに生まれてくるひとりの男の子、イエスは救い主だということを明らかにしたのです。バプテスマのヨハネがイエスを見た時に「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ1:2)と言いました。どちらの表現もイエスが救い主だということを明らかにしています。それゆえに、テキスト24:47のことばが真実だと言えるのです。「その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」と。イエス・キリストが救い主だから、こういうことが可能なのだと言っているのです。

47節の初めに「その名によって」と出てきます。これは一体何を指しているかということ、イエス・キリストご自身の正体、イエス様が一体だれなのか、そしてイエス様のみわざ、イエス様が何をされたのか、その両方を含んでいます。イエスがだれなのか、イエスが何をなされたのか、その二つが「その名によって」に含まれているのです。というのはこれを見ていただくと、「その名」は次の罪の赦しを得させる悔い改めと関連しています。皆さんもそのことにお気づきになると思います。つまりここでみことばが教えていることは、「その名によって」、つまりイエス様の名によって一体何が可能となったのかがここに記されているのです。ルカは、この主イエスというお方、またこの方がなされたみわざによって、罪の赦しを得ることが可能になったのだということをこの47節で教えるわけです。

結論: ですからイエス様の復活、イエス様の十字架と肉体を持った死よりの復活は、イエスが一体だれなのか、イエスの正体、実態を明らかにしたのです。つまり彼がまことの神であり救い主だということを証明したのです。だから彼は、救いを求める者たちに救いを与えることができになるのです。

もう一度46節から見ると、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、……宣べ伝えられる。」とあります。ですからあの天使が言ったように、あのバプテスマのヨハネが言ったように、確かにこの方は救い主であり、イエス・キリストの十字架と復活によって、信じるすべての人に罪の赦し、救いを与えてくださる。主イエス・キリストは神であり、救い主だから、私たちはこの方の言われたこと、この方のなされたことに信頼を置くことができます。

弟子たちが変えられていくために必要だったのは、先ほど見たように、神様のおことばに全く信頼を置くことです。そしてイエス様の言われたことに信頼を置くこと。そしてこのイエス・キリストご自身に全き信頼を置くことです。そのレッスンを彼らは学ぶことが必要だったのです。この方に信頼しなければこの方のみわざを期待することができない。何度も言うことですが、神様に信頼していない人がどうやって神様のみわざを期待します？信仰の勇者たちを見た時に、彼らが神様から言われたことは人間的に見たら不可能と思えること、信じがたいことでした。だから彼らがそんなの無理だと言っていたら何も起こらなかった。エリコの城壁は崩れることはなかったのです。主イエス・キリストはマリヤから生まれることはなかったのです。神はもちろん計画のために別の人を選んだかもしれない。でも、どうして神様がこういうみわざをなされたかということ、神がそういうみわざをなすにふさわしい人たちが存在したのです。そしてそういう人たちを通して神のみわざがなされてきたのです。

教会が誕生するという、これまでになかったことがこの世界で起ころうとしているのです。そのためには神に全く信頼を置いた人々が必要だったのです。みことばを徹底的に信じている者たちです。これが神のことばだと信じて、みことばに従っていこうとする勇者たちです。神がそういう人々に変えてくださり、それゆえに神は彼らを用いてくださり、このすごいみわざを彼らを通してなさしめたのです。私たちも神様によって用いられます。神は私たちのような者を使ってくださる。でも必要なことは、この神に対する信頼です。そんな信仰者でしょうか？無理だとあなたの心が言っても、神が言われるなら可能だと、そのような信仰を持って歩んでおられるかどうかです。神のみことばは必ずなる、神がこういう約束を与えたら絶対それは可能なのだという信仰を持って皆さんが生きていくかどうかです。あなたがそのような人になりたいと思えば、神はあなたをそのような人に変えてくださるし、そんなあなた

を神は喜んで用いてくださる。

B. 神からの務めを明確にした：「あなたの証人」である。 48節

まず、みことばと主に対する強い信頼を彼らは学ばなければいけなかった。二つ目に神がなさった働きは、神からの務めをこの弟子たちに明確になさいました。47節には「悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」とあります。そしてその働きをだれがするのか——。48節に「あなたがたは、これらのことの証人です。」と書いてあります。神様は、私は救いにあずかっていた弟子たちを証人として用いると言われた。そして実際にこの弟子たちは証人として生きたのです。使徒2：32でペテロが言っています。「私たちはみな、そのことの証人です。」と。3：15に「いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」、5：32「私たちはそのことの証人です。」、10：39でも「イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行なわれたすべてのことの証人です。」、10：41「神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。」と、13：31「きょう、その人たちがこの民に対してイエスの証人となっています。」、22：15「すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。」、26：16「わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。」と。神はこの弟子たちを、この信仰者たちを神のすばらしさを証する証し人として用いたのです。

* 「証し人」として語るべきメッセージ

もちろん証人として私はあなたを用います、あなたたちを用いますという務めを与えただけではない。証人として語るべきメッセージも主はここで与えておられます。47節に戻ると、「その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まって」とあります。先ほども見たように、イエス様による罪の赦し、救いというのは悔い改めによってもたらされるということを教えています。先ほど我々が見て来たように、我々はイエス様が一体だれなのかというのを人々の前に明らかにするのです。そしてイエス様が何をなさったのかを明らかにする。私たちが人々の前でイエス様が一体だれなのか、イエス様はまことの神であり、創造主であり、そして私たちを救ってくださる方だと。そのイエス様がだれであるかを明らかにした時に、人々はあることに気づくのです。私はそのまことの神を信じてこなかった、私はそのまことの神様に従ってこなかったと。その方を愛することもなく、その方に従うこともしてこなかった。すると彼らはこの神に対して自分のこれまでの歩みが間違っていたことに気づかされます。そして、イエス様が何をなさってくださったのか、そんな神に逆らう私たちのために、贖いを成し遂げてくださった。身代わりとなって十字架で死んでくださった。それを聞いた時に、自分の罪が示された罪人たちは神が備えてくださった救いを喜んで受け入れようとするのです。ですから私たちが語るべきメッセージというのはあなたの歩みは間違っている、あなたを造った神に対してあなたは逆らっている、敵として生きている、罪を悔い改めなさいと。そして神が備えてくださった救いを受け入れなさいと。実際にそういうメッセージをこの弟子たちは語り続けたのです。使徒2：38、ペテロが最初にペンテコステの時に語ったメッセージの中に「悔い改めなさい。」と。そして3：19にも「あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」と。8：22「この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」と。そしてこのメッセージが47節に書かれてあったように、「エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられ」、そのように弟子たちはこのメッセージを携えて世界へと出て行くのです。

パウロはギリシャのアテネの町に行った時に使徒17：30でこんなメッセージを語っています。「神は、そのような無知の時代を見ごぞしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」と。使徒20：20-21にも「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」、使徒26：20にも「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。」と。ユダヤ人だけではなく、すべての人々にパウロは同じメッセージを語った、弟子たちは同じメッセージを語ったのです。どんなメッセージかというと、罪を悔い改めて、このイエス・キリストの救いにあずかりなさいと。イエスが一体だれなのかを語り、そして、イエス様のなされた救いのすばらしいみわざを彼らは宣べ伝え続けたのです。

同じルカが記した使徒1：8「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と。確かにそのとおりに彼らは世界じゅうに出て行ってキリストの証人として生きたのです。ある人は思うかも知れません。だって彼らはイエス・キリストを直接見たのだと。彼らはイエス様の声を直接聞いたし、イエス様から直接命令をいただいたからと。信仰者の皆さんによく考えていただきたいのは、イエス様によって救いをいただいた時、あなたが神様からいただいた喜びというのはこ

とばでは言い表せないようなすばらしいものだったでしょう？あなたの内側からわいてきた神に対する愛について、それはだれかから教えられたものではなくて自然に内側から出てきたものです。イエス様はこんなに私を愛してくださった。感謝しますと。何とかその愛に報いていきたいと。皆さん、救いの喜びというのは、我々信仰者ひとりひとりに与えられたものであって、だれかから教えられたものではない。だから私たちはそれを人々に証しすることができるのです。主によって罪赦された喜びを持っていること、これは我々信仰者ひとりひとりが実際に経験したものです。だからその証人として我々はそれを人々に語る事ができる。イエス様に対する愛が心の中に芽生えてきた、それは神が私たちのうちに働き、救いのみわざをなしてくださったからであり、我々の愛する方を人々に証しすることができる。我々は確かにイエス様を見ていなくても、イエス様の声を直接聞いていなくても、我々のうちに働いておられる神のみわざを知っている者として、その証し人として出て行くことができる。神様は私たちを神学者として送ろうとしているのではないのです。我々を証人として送ろうとしているのです。私たちができることは、主が私にしてくださったことを伝えることです。こうして弟子たちは、これが私の使命なのだということを確信して、主に信頼して出て行くのです。

C. 神の務めを果たす要訣 49節

みことばや主に対する信頼を増し加えただけではないのです。神の務めを明確にただけではない。三つ目に神がなされたことは神の務めを果たす要訣を明らかにされた。どうしたらこの務めを果たすことができるのか、その鍵を教えてくださいました。証し人として出て行きなさいという、それだけで神のメッセージは終わっていません。どうしたらその務めをあなたや私が果たせるのかを49節で教えてくださいました。「さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」と。何の話をしているかという、聖霊なる神様の話です。なぜ聖霊なる神様の助けが必要なのか――。

1. 語る者に力を与える

その理由の一つ目は、聖霊なる神様は語るあなたに力を与えるからです。ルカはこのみことばを記すに当たって、主なる神様の力をよく教えられて知っていました。あの年老いたザカリヤとエリサベツにヨハネが与えられたこと、それを記しているのはルカです。絶対にあり得ない、そのことを神様がされたのです。絶対に起こり得ない処女マリヤに子どもが宿った。それもルカが記しています。だからルカ1:37に「神にとって不可能なことは一つもありません。」とあります。ルカ18:27には「イエスは言われた。『人にはできないことが、神にはできるのです。』」、間違いなくルカ自身この確信を持っていました。私の神にできないことは何一つないと。神が出て行きなさい、この働きをしなさいと言われた以上、この神が私の力であることを知っています。しかもその神の力というのは、人間の思いをはるかに超えたものであり、この神に不可能なことは何一つない。そんな神の力をいただきながら、我々は働きをなすことができます。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」、パウロはピリピ4:13で言いました。神の力を知っていたからです。聖霊なる神様はこの証し人として、神の真理を語る語り手に力を与えてくれます。

2. 聞く者に悟りを与える：聖霊なる神の働き

またそれだけではないのです。今度は聞く者にこの聖霊は悟りを与えるのです。

・ 教える：ヨハネ14:26、Iコリント2:10—13

45節に出てきました。「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開い」と。イエス様はこうして弟子たちの心に働いて彼らがみことばを理解できるように働きをなされたのです。聖霊なる神様は、聞く者たちに働いてこの真理を彼らに教えてくださるのです。ヨハネ14:26に「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」とあります。すべてのことを教えてくれる。あなたもこの聖霊なる神様の働きがあつてこの真理を教えられて悟ることができたのです。

・ 罪を責める：ヨハネ16:8

また聖霊なる神様は教えるだけではない、聞いている人たちの心に働いてその人たちの罪を責められます。同じヨハネ16:8には「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」とあります。聖霊なる神様はそうして人々の心に働いてくださって、自分は罪に汚れた存在だということを悟らせてくれると。

・ 真理へと導く：ヨハネ16:13

同時に聖霊はその人を真理へと導いていくのです。ヨハネ16:13には「その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。」と。

聖霊は真理を教えてくださいました。聖霊は罪を明らかにしてくださいました。聖霊はあなたを真理へと導いていく。ということは、この聖霊の助けに頼りながら証しをしなければ何の働きも期待できません。あなた

がどんなに話術巧みに、理路整然と話したとしても、あなたのことばで人々にこの真理を教え込むことはできないのです。パウロがこう言っています。「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。」(Iコリント2:4)と。彼が雄弁だったから人々は彼の話聞いて信じたのかというと、違うと言うのです。神がその働きをした。今見て来たようにこういう働きを聖霊なる神様は聞く者の心の中になしてくるのです。

3. 聞く者に救いを与える：使徒11:18

そしてもう一つ付け加えるとしたら、聖霊なる神様は聞いている者たちを救いへと導くのです。彼らにその真理を悟らせるだけではない。真理へと導くだけではない。罪を示すだけではない。その人を救いへと導いてくれるのです。使徒11:18にユダヤ人たちは異邦人が同じように救われたというニュースを聞いた時になかなか信じられなかった。そして彼らはその件について議論するわけです。結論はこうです。『『それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。』と言って、神をほめたたえた。』と。彼らはわかったのです。自分たちも神が働いて救いに導いてくれたように、神は異邦人にも同じように働いて救いへと導く。ということは、私たちがどんなに巧みに話してもその人たちが私たちの語る真理を理解できるかというと、聖霊が働かないとわからない。我々がどんなに懇願したとしても彼らがこの救いにあずかるには、聖霊に働いてもらわなければいけないのです。その働きは神の働きです。我々の働きは証し人としての働きです。神が私のために何をしてくださったか、イエス様とは一体だれなのか、その真理を語りなさいと。そしてその時に私たちに必要なことは、神の力を期待しながらその働きをなすことです。

主イエス・キリストの復活に疑念を抱いていた弟子たちは大きく変えられました。彼らは主のみことばと主ご自身への絶対的な確信を持ったからです。そのことを神が彼らに教えてくださった。彼らは聖書の言っていることは必ずそうなる、イエス様が言われたことは必ずそうなるのだと確信しました。そしてイエス・キリストを死からよみがえらせた神の力が、実は私にも与えられている。もしそれがなければ私たちのなすことは全部失敗に終わります。でも神の力が死を克服し、イエスを敢然と死からよみがえらせた神の力が私たちには与えられていて、その力によってこのわざをなしなさいと。その時、初めて私たちは神のみわざを期待できるのです。神が働いてくださるならば、私たちが人間的に絶対不可能と思えることも、みこころなら神はそれはなされると。そんな信仰者が私たちの群れに何人います？神のみことばを徹底して信じている者たちです。神のみこころは絶対になるのだという強い確信を持っている人たちです。そして神が私に証し人という務めを下さったのを知っているのです。その務めを神が備えてくださった力をいただきながら行い続けている信仰者、こういう人を神様はお使いになります。

あなたにどれだけの聖書的な知識があるかは関係ないのです。この弟子たちを神様が用いたように、あなたや私を使ってください。そのためには、こういった条件が必要だということを我々は見てきました。我々が覚えなければいけないのは、神は私たちを、あなたを喜んで用いようとしてくださっていることです。我々自身がノー・サンキューと言っているのです。そんな難しいことできませんから、だれか別の人に任せてください。私はもう体が弱いですからとか、私は忙しいですからとか、いろんなエクスキューズを立てて神が働くと言っているのに。みことばを見た時に条件はありません。あなたは何歳になったら証人になりますとか、何歳になったらあなたは証人卒業ですとか、こういう忙しい時は少し証人を横に置いておいてなどということがどこに書いてあります？あなたや私が救われたのは証人として生きるためです。その力も神様が下さったのです。どんな状況にあっても、この働きをなして行くことができる。

最後に一つ言います。それを信じるかどうかなのです。多くの人はいろいろなエクスキューズを立てるのです。もうちょっとしたら、もうちょっと条件が改善したらと。その人がやっていることは、神様、たとえあなたが言われても私はノーです、できませんと。でも神様、私を使ってください、あなたの言われたことを信じます、どうぞ証し人として私を用い続けてくださいと、そうやって我々が生きていくなら、神があなたを通してどんなことをなさるのか、少なくとも期待できます。私たちは自分たちのために生きているのではない。この方のために生きているのです。この方に用いていただけることは私たちにとって最高の幸せです。主よ、どうぞ私を証人として使ってください。そのために救ってください、そのために生かしてくださっている、私を使ってくださいと。この群れのひとりひとりが、群れ全体がそのように変えられて、初代教会の時に神が大いなるみわざをなされたように私たちもそのみわざを期待する、そんな群れとなることを期待します。

《考えましょう》

1. 主イエスの復活が証明したことを挙げてください。
2. 主が宣教の働きにあなたを用いられる理由を挙げてください。

3. 信仰者に、主の御力が日々必要な理由を挙げてください。
4. 主が聖霊なる神を各信仰者に与えられたのはどうしてだと思えますか？